《短　信》

九州・沖縄方言の2つの音声変化

柴田　武

（1）　唇音進化の傾向

国語史にはp>Φ>hのように示すことのできる，有名な「唇音退化傾向」がある[注1]。これは，唇の閉鎖が解け，開放に向かった変化である。

ところが，この傾向と逆方向の「唇音進化」とでも言うべき傾向が九州・沖縄方言に見られる。このことについては，すでに指摘する機会[注2]があった。ロドリゲスの『日本大文典』に，博多方言のkwa>pa，gwa>baと書くことのできる訛が報告されている[注3]。現代でもなお，長崎県対馬・熊本県天草南部・鹿児島県西部や薩摩半島南端部でkue>pe:（食え）という変化があると報告されている[注4]。しかし，極め付きは，『日本言語地図第5巻』の249図（とげ［裂片］）と250図（とげ［刺・棘］）に出てくるpiiである。鹿児島・熊本両県で，前者は2地点に，後者は11地点にpiiがあり，その分布地域をとり巻く形で九州各地にkuiがある。これは，明らかにkui>*kwi>*kbi>piiのように変化したものと考えられる[注5]。『日本方言大辞典』もその情報の一部を報告している[注6]。すなわち，piは大分県別府市で「とげを持った低木類。茨（いばら）」をさし，鹿児島県，大隅地方で「とげ」をさす。

さて，奄美・沖縄方言には，上と同じ傾向ではないが，これと同じ系列の傾向がある。それは，w>bという変化で，沖縄の宮古島よりも西及び南の地域に広く認められる[注7]。平良市西里ではbata（<wata［綿］），buz（<woru［折る］）と言う。w>bの変化は，上にあげたkuiからpiiに至る変化の途中にある推定形kwi>kbiの中にある。われわれは一時期bはwよりも古い，原始日本語にさかのぼりうる音と考えたこともある[注8]。しかし，現在では上村幸雄氏（琉大名誉教授）も，bのほうを新しいという見解に変わっている[注9]。

もともと近畿以南沖縄に至る地域では，母音o，uの円唇性が強い。唇を円め，つき出す傾向が強い。また，奄美・沖縄では，古代のp音を頑強に今日まで残している。

この強い円唇化を支えにして唇音進化が起きたのだろうと思う。

（2）　有気音を生み出した強い呼気

宮崎県を一部含んで鹿児島県・沖縄県の人の発話を聞いていると，特に録音されたものに耳を傾けると，発音に強い呼気の伴うことに気づく。特に，沖縄県先島では，例えば川平（カビラ）では，「花」はpḁnḁのように母音を2つとも無声化し，ときにはpḁn̥ḁのようにnまで無声化する[注10]。こうなれば，強い「ささやき」でしゃべっていることになる。

呼気の強さは非線条的（non-linear）性質のもので，「花」という語がいつも上の3種類のどれかで発音されるわけではない。ときにpa̤na，pana̤などと聞こえる発音に接する。第一，こういう声の消滅を言語音として記述すべきかどうか疑いが残る。

ところが，この呼気の強さが言語音（方言音）に大きな変化を引き起こしたものらしく考えられる。

奄美大島で有気のp‘（例えばp‘uni［骨］）と無気のp（例えばpuni［舟］）のような有気・無気の音韻論的対立が生じたのには，呼気の強さの利用があったのではないか。「骨」がponiからp‘uniに変化する際に，puni（舟）との同音衝突を避けて再生したのではないか。

ある音を有気で発音するのには，強い呼気を口腔の前方に寄せる必要がある。それに対して，無気で発音するのには，強い呼気を口腔の後方に寄せる必要がある。そのときしばしば喉頭を緊張させるので，無気音はしばしば喉頭化音（p’uni［舟］）でもある。

沖縄・奄美の有気・無気の対立を中国語のadstratum（傍層）で説明しようと試みたことがある。[注11] 琉球王朝時代，首里，特に王府の中では中国語が通用していたのではないか，という見解（生前の仲宗根政善氏）もある。そういう中国語をわきに置いての変化だったのではないかと考えたのであった。それも要因の1つとして否定できないが，呼気が強い（したがって利用できる呼気がたくさんある）ということのほうが要因として強いと見るべきではないかと考えるようになった。

さきに示した先島方言の著しい無声化は，宮古大神島ではすべての有声子音を無声化するという劇的な変化を引き起こした。大神方言の子音はすべて無声音で，有声子音はない。

呼気の強さは，人間の発声の特徴，つまり生物学的特徴に係わることである。宮崎県以南の地域にはかつて熊襲・隼人という名の異民族がいたという情報も参考になる。

以上の論を客観化するのには，呼気の強さを計測して示さなくてはならない。1つ1つの音ではなく，談話，せめて文単位で呼気の強さを計って比較できればいい。しかし，そうした研究はもう私にはかなわない。若い世代に期待して，短信欄を借りて発言する次第である。（2001.09.09）

注1　『国語学大辞典』（1980。東京堂出版）の「国語史」の項。築島裕氏執筆。

注2　《昭和50年秋季大会シンポジウム》国語史と方言。国語学104（1976）。

注3　ジョアン・ロドリゲス原著『日本大文典』（土井忠生訳注。1955。三省堂）p. 160。「流音のQua（クヮ），Gua（グヮ）をすべてPa（パ），Ba（バ）に変へる…」として，Quabun（過分）をPabun，Quanxi（罐子）をPansu（ぱんす），Quannen（観念）をPannen（ぱんねん）（以下略））という例をあげる。

注4　上野善道編『日本方言音韻総覧。付方言音節引き索引』（『日本方言大辞典』付録(19)の「クエ」の項。p. 22。

注5　この情報は初め故徳川宗賢氏からもらったものである。改めて，その友情に感謝し，冥福

を祈る。

注6 『日本方言大辞典』(1989)の「ぴ」の項。p. 1975。

注7 柴田武『方言論』1988。p. 376。

注8 例えば村山七郎氏。氏は，のちにbのほうが新しいとした。(個人的な情報)。

注9 上村幸雄「八重山方言から東北方言まで――日本語の方言形成過程について――」『宮良当社記念論集』(2000。宮良当社誕生百年記念事業期成会。) p. 80。

注10 日本放送協会編『全国方言資料（各巻ソノシート付)。11 琉球諸方言編(II)』1972。

注11 柴田武「奄美・沖縄諸方言の喉頭化音について」『鬼春人先生還暦記念論文集』1977。

――東京大学名誉教授――

(2001年9月11日　受理)